

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 8 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530868

研究課題名(和文) 情動表出についての認識の発達：幼児期3年間の縦断的研究

研究課題名(英文) The development of preschool children's views about functions of emotional expressions: Longitudinal analysis from four-year-olds to six-year-olds

研究代表者

久保 ゆかり (Kubo, Yukari)

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：10195498

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼児期3年間において、情動の経験と表出についての認識がどのように発達していくのかについて、4歳時点からインタビューを実施し、その1年後、2年後を追い、発達的变化を検討した。その結果、喜びの経験については4歳時点で既に認識されているが、悲しみと怒りの経験と表出についての認識は5歳時点以降となり、特に、怒りについての認識は遅れることが見出された。また、怒り表出の機能について語るその内容とその変化のあり方には、多様性のあることが見出された。そこから、怒りの表出についての認識の成長の仕方には、多様な経路のあることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to explore the development of preschool children's views about functions of emotional expressions. Four-year-olds were interviewed and asked questions; "Have you ever felt happy (sad, or angry) in your preschool?", "what kind of event made you happy (sad, or angry)?", and "how do your classmates may react to your happy (sad, or angry) expression?" They were interviewed again in one year and two years later. The findings were as follows; almost all of four-year-olds reported on happy experiences and more than half of five-year-olds reported on the functions of happy and sad expressions. On angry expressions, even six-year-olds were less likely to report functions of them. It was suggested that understanding of the angry expression's functions might be more difficult than happy ones and sad ones. And results also suggested that there was diversity in developmental changes of preschool children's views about functions of emotional expressions.

研究分野：社会性の発達心理学

キーワード：情動発達 情動表出 情動経験 幼児期 縦断的研究 インタビュー調査

1. 研究開始当初の背景

近年、他者との関係のなかで自分の思い通りにならないとすぐに攻撃的な行動をとってしまったり、あるいは対人交渉の場を自ら避けて他者との関係を回避してしまったりする子どもの問題がクローズアップされている。本研究は、そのような社会情動的な発達の問題へ取り組む際の、基礎的な資料を提供しようとするものである。「他者の権利を侵すことなく自らの要求を主張できる力」の発達を捉えようとするとき、「自他の中で情動のコミュニケーションを適切に展開する力」(Saarni et al., 2006)の発達について検討することが決定的に重要である。そこで本研究では、情動表出について認識する力の発達に焦点を絞り検討していくことにする。

従来、子どもの情動に関する発達研究においては、情動状態についての理解は数多く研究されてきた(Saarni et al., 2006)が、情動表出の結果と影響についての理解は、少数の例外(坂上, 2000)を除いて、あまり研究されてこなかった。しかしながらそれは、子どもの情動表出の仕方や他者の情動表出への反応の仕方と関連し、社会的な適応にも影響を与える重要な側面である。

そこで本研究では、園生活における、「喜び、悲しみ、怒り」について尋ね、日常生活場面での情動表出についての認識を取り上げて検討することにする。パイロット研究として久保(2007)は、20名の幼児を対象として5・6歳時点において20名にインタビューを試みた。それによると、情動表出についての認識には、多様な個人差のあることが推測されている。例えば、怒りを表出すると友だちは「いやだなんて思う」といった否定的な機能について語る子どももいれば、「どうしたのって聞いてくれる」、「(怒らせた子に)やめてあげて言う」といった建設的な機能について語る子どももいた。そのような認識は、幼児期3年間でどのように変化するのであろうか。本研究では、幼児期の3年間を追って縦断的にインタビューを実施し、情動経験と情動表出についての認識の多様性とその発達の道筋について検討を加えることとする。

2. 研究の目的

幼児を対象にインタビューをおこない、4歳から6歳にかけての3年間を追うことによって、次の4点を明らかにする。(1)そもそも幼児は、自他が情動を経験していることを認識しているのかどうかを明らかにする。また、その年齢差について明らかにする。(2)自他の情動が表出された場合に、それは相手に対してどのような結果や影響を及ぼすのかについて、捉えて語れるのかどうかを明らかにし、情動表出の機能を認識しているのかどうかを明らかにする。(3)インタビューと並行して、所属園での自由遊び場면을参与観察し、情動の交わり合いの実際についてフィールドノーツに記録する。そしてその記録を

念頭におきつつ、インタビューを実施する。それによって、文脈や背景を共有する者として、子どもの発話の意味を捉えることを目指す。(4)パイロット研究からは、情動表出についての認識には、多様な個人差やタイプの違いがあることが示唆されている。そして、そのような多様性自体も発達していき、それぞれの発達の道筋にも多様性があるのではなからうか。本研究では、個々人の認識の多様性を明らかにし、その子どもたちを縦断的に追うことによって、発達の道筋の多様性についても示唆を得ることを目指す。

3. 研究の方法

4歳児(年少組児)を対象として、1対1のインタビューをおこない、園生活における、「喜び、悲しみ、怒り」について尋ね、日常生活場面での情動経験および情動表出について尋ねる質問をした。その4歳児達の1年後、2年後を追って、同様のインタビューを実施した。さらにインタビューと並行して、その子どもたちに対して、園での自由遊び場면을参与観察し、情動の交わり合いの実際についてフィールドノーツに記録した。そしてその記録を念頭に置きつつ、園生活について尋ねた。

参加者; 東京都内の園に所属していた4歳児(年少組児、平均年齢; 4歳5ヵ月、レンジ; 3歳11ヵ月~4歳11ヵ月)31名。1年後の5歳時点では、転出等により、28名。さらにその1年後の6歳時点では、26名。それぞれの年度において研究参加について引き続き保護者からの同意を得ることができた子ども達で、かつ、インタビューの誘いに応じてくれた子ども達である。(なお、数名の子ども達が、途中から参加した。その子どもたちのデータは、今後、インタビュー経験の影響を検討する際に分析対象とする。)

インタビュー実施時期; 年少組における2月3月(4歳時点と記す)、1年後の年中組における2月3月(5歳時点と記す)、さらにその1年後の年長組における2月3月(6歳時点と記す)。

手続き; 対象者所属園の1室にて、筆者と1対1のインタビューを実施した。質問の基本的な形は次の通りであった。子どもの園生活の実際についてのフィールドノーツを念頭に置きつつ、文脈や背景を共有する者として、子どもの表現や応答を尊重し受け止め、子どもが表したことは適宜繰り返したり確かめたりしながら尋ねた。

自身についての経験質問(4歳時点から6歳時点まで); ちゃん(参加者の名前)は園(所属園の名前)でうれしい(悲しい・怒った)気持ちになったこと、あるかな? それは、どういうことがあったとき?

自身についての表出質問(5歳時点と6歳時点のみ); うれしそうにしている(悲しそうにしている・怒ったりしている) ちゃんを友だちが見たら、友だちは、どうする

(どう思う)かな? { の経験質問にて「ない」と答えた場合は、「ちゃんがもしもうれしそうにしていた(悲しそうにしていた・怒ったりしていた)ら」ということばを添えて、同様の質問をした。}

他者についての経験質問(4歳時点から6歳時点まで); の経験質問において「ちゃん」を、「お友だち」に換えて尋ねた。

他者についての表出質問(5歳時点と6歳時点のみ); の表出質問において「ちゃん」を、「お友だち」に換えて尋ねた。

なお、1年目の調査によって4歳児は、情動表出についての質問()に答えることは困難であることが見出されたので、4歳時点では情動経験についての質問()のみを実施することにした。

4. 研究成果

分析1: 園生活における自他の感情経験と感情表出について幼児はいかに答えるか 応えることの有無について

分析対象者は、園の4歳児(年少組児)31名、転出等により減り、5歳時点では28名、6歳時点では26名であった。その子どもたちが各質問(4歳時点では、 、5歳時点と5歳時点では、)に答えたかどうかを分類した。その結果を表1から表4に示した。感情経験の有無については、喜びについては、4歳時点ですでにほとんどの子どもが、自他ともあると答えていた。一方、悲しみと怒りについては、4歳時点では、ないとした子どもの方が多かった。特に怒りについては、5歳時点でもないとする子どもが多く、とりわけ自分の怒りについては、6歳時点でもないとする子どもの方が多かった。

そこから、喜びの感情経験については、4歳時点ですでに捉えられやすく語られやすいことが推測される。一方、悲しみと怒りの感情経験については、他者のそれらについては6歳時点になれば捉えられやすく語られやすくなるが、自分のそれらについて捉えて語ることは、6歳時点であっても必ずしも容易ではないことが示唆される。

それぞれの感情が表出されたときに、自他はどのように対応するかについては、喜びと悲しみについては、5歳時点ですでにほとんどの子どもたちが語っていた。一方、怒りについては、5歳時点ではほとんどの子どもが対応を語ったのに対して、1年後の6歳時点では、むしろ語らなくなった子どもたちが少なからず見られた。

そこから、感情の表出の結果や影響について捉えて語ることの発達については、喜びと悲しみが先行し、5歳においてすでにほとんどの子どもが語り、1年後の6歳時点でも同様に語り続けることが窺えた。一方、怒りの表出については、5歳時点よりも6歳時点の方が語られにくいといった逆転現象を示す子どもが少なからず存在していた。怒り表出の機能について語ることは、加齢とともに

直線的にできるようになっていくといった単純なものではないことが示唆される。

表1 自分が各感情になったことはあるか(単位:人)

| 年齢 | 喜び | | | 悲しみ | | | 怒り | | |
|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|
| | 4 | 5 | 6 | 4 | 5 | 6 | 4 | 5 | 6 |
| 有り | 26 | 25 | 25 | 11 | 16 | 13 | 5 | 7 | 10 |
| 無し | 5 | 3 | 1 | 20 | 12 | 13 | 26 | 21 | 16 |

表2 各感情を表出したときに友だちはどうするか(単位:人)

| 年齢 | 喜び | | | 悲しみ | | | 怒り | | |
|-----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|
| | 4 | 5 | 6 | 4 | 5 | 6 | 4 | 5 | 6 |
| 語る | | 26 | 21 | | 25 | 22 | | 28 | 19 |
| 語らず | | 2 | 5 | | 3 | 4 | | 0 | 7 |

表3 友だちが各感情になったことはあるか否か(単位:人)

| 年齢 | 喜び | | | 悲しみ | | | 怒り | | |
|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|
| | 4 | 5 | 6 | 4 | 5 | 6 | 4 | 5 | 6 |
| 有り | 26 | 25 | 23 | 15 | 16 | 18 | 11 | 12 | 18 |
| 無し | 5 | 3 | 3 | 16 | 12 | 8 | 20 | 16 | 8 |

表4 友だちが各感情を表出したとき自分はどうか(単位:人)

| 年齢 | 喜び | | | 悲しみ | | | 怒り | | |
|-----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|
| | 4 | 5 | 6 | 4 | 5 | 6 | 4 | 5 | 6 |
| 語る | | 28 | 23 | | 27 | 24 | | 26 | 20 |
| 語らず | | 0 | 3 | | 1 | 2 | | 2 | 6 |

分析2: 園生活における怒りの表出について幼児はいかに語るか 5歳時点から6歳時点にかけての変化

分析1により、怒りの表出についての認識の発達には多様な経路のあることが窺えた。そこで分析2では、5歳時点から6歳時点にかけての一人ひとりの変化(26名分)に着目して分析し、怒りの表出についての認識の内容がどのように発達していくのか、検討した。

分析方法; 子どもたちの回答を坂上(2000)と、パイロット研究の久保(2007)に沿って、カテゴリに分類した。(カテゴリの内容を説明した上で、心理学関連領域を専門としている研究者1名にも分類を依頼した。一致率は84.6%だった。不一致の事例は討議により一致させることが可能であった)。そして、全体的な変化を抽出した。さらに一人ひとりの5歳時点から6歳時点にかけての変化を見て、その仕方が類似しているものをまとめ、変化の経路を抽出した。

全体的な変化; 友だちの怒り表出に対して自分は、「怒る、やな気持ち、悲しい、泣く、逃げる等」の否定的反応をすると語ったのは、5歳時点では4割(11名)だったが、6歳時点では半減した(2割5名)。一方、「なんで

怒ってんのってきく」といった問題解決を意図した反応を語ることは、5歳時点では1割(3名)だったが、6歳時点では4割(11名)に増えた。また、「わからない」「覚えてない」と語ること・何も語らないことは、5歳時点(1割2名)よりも6歳時点(2割6名)の方が多くなっていた。

5歳時点から6歳時点への変化の経路；6つの経路(21名)と、それ以外(5名)の変化が見出された。以下に6つの経路について記述する。

5歳時点から継続して否定的反応を語る経路；4名が該当。例えば、5歳時点で「悲しい」、6歳時点には、「自分が怒ったことないから、(友だちが怒ると)悲しくなっちゃう」と語った。5歳時点から一貫して、怒り表出は、否定的な反応を引き出すと認識している発達経路があることが覗える。

5歳時点では否定的反応、6歳時点では問題解決を意図した反応を語る経路；例えば、5歳時点では「やな気持ち」、6歳時点では「ちょっとどきどきするけど、どうしたのって聞いてみる」、6つの経路のなかで最多の6名が該当した。主要な経路であることが覗える。

5歳時点では否定的反応を語るが、6歳時点では何も語らなくなる経路；3名が該当した。

5歳時点では表出の抑制を語るが、6歳時点では何も語らなくなる経路；3名が該当した。例えば、5歳時点では「それをやめろって言う」、6歳時点では「いろんなこと言ってる、覚えてない」。この例からは、年長になると怒り表出はもはや単に抑制すべきものではないと気づくが、抑制に代わる、より複雑な対応を創出したり、それを表現したりするのは難しいのかもしれないと思われる。

の経路でも同様に、年長になると怒り表出はもはや単に否定的反応を惹起するものではないと気づくが、それに代わるものを創出したり表現したりすることが難しいということがあるのかもしれない。

5歳時点では表出の抑制を語り、6歳時点では問題解決を意図した反応を語る経路；例えば、5歳時点では、「だめだよって言う」、6歳時点では「何したの?とか言うの」、2名が該当した。

5歳時点からずっと問題解決を意図した反応を語る経路；3名が該当した。例えば、5歳時点で「ごめんねって、二人で言った」、6歳時点には「『これは ちゃんが作ったんだよ』って優しく言ったげる(勘違いで怒っている友だちに勘違いであることを伝えるということ)」。5歳時点から一貫して、怒り表出は、問題解決を意図した反応を引き出すと認識している発達経路があることが覗える。

以上から、5歳時点から6歳時点の園生活における怒りの表出についての認識の発達には、少なくとも6種類の経路のあることが示唆される。特に、5歳時点では何らかの機

能を語っていたのに、1年後には語らなくなってしまったという変化は、この時期の発達、加齢とともに直線的に変化するという単純なものではないことを示唆しており、今後、園生活における実際行動との関連も含めて、分析をさらに重ねることが必要である。

本研究は、年齢ごとの平均的な姿を結んで1本の発達の道筋を描くという、従来の単一路線的な発達図式を補完する「多様な道筋の発達図式」の可能性を検討したものと位置づけることができる。単一路線で表されることの多かった発達のあり方を見直し、再検討することが必要と考える。また保育および養育の場に対しては、多様な個性を有する子どもたちに対して「次のステップ」の見通しをたてる際に、検討のための手がかりを提供し得ると考える。

<引用文献>

坂上裕子(2000) 情動表出に関する幼児の認識 日本発達心理学会第11回大会発表論文集 p348

Saarni, C., Campos, J.J., Camras, L. A., & Witherington, D. (2006) Emotional development: Action, communication, and understanding. In N. Eisenberg (ed.) *Handbook of child psychology, sixth edition, vol.3: Social, emotional, and personality development*. Pp.226-299. New York : John Wiley & Sons

久保ゆかり(2007) 幼児期における感情表出についての認識の発達：5歳から6歳への変化 東洋大学社会学部紀要、44、89-106.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

久保ゆかり、幼児は感情経験をいかに語るか 園での行事経験についての横断的インタビュー、東洋大学社会学部紀要、査読無、51巻2号、2014年、pp.23-38

〔学会発表〕(計5件)

久保ゆかり、幼児期の社会性と感情、感情心理学会第23回大会 2015/6/13、新渡戸文化短期大学(東京)招待講演として確定

久保ゆかり、園生活における自他の感情経験と感情表出について幼児はいかに応えるか 応えることの有無についての分析 日本心理学会第78回大会、2014/9/10、同志社大学(京都)

久保ゆかり、園生活における自他の感情経験の有無について幼児はいかに応えるか 年中組(5歳)時点における多様性、日本発達心理学会第25回大会、2014/3/21、京都大学(京都)

久保ゆかり、園生活における自他の感情経験の有無について幼児はいかに応えるか 年少組(4歳)時点における多様性、日本発達心理学会第24回大会、2013/3/15、

明治学院大学（東京）

久保ゆかり、ラウンドテーブル「自己・関係性に関する理解の発達プロセスを追う 新たな理論的見地と方法論を求めてー」における話題提供「文脈共有インタビューの試み」、日本発達心理学会第23回大会、2012/3/9 名古屋国際会議場（名古屋大学）

〔図書〕(計5件)

久保ゆかり他、福村出版、新・発達心理学ハンドブック、2015年、印刷中

久保ゆかり他、誠信書房、心理学辞典〔新版、2014年、pp210-213、pp324-326

久保ゆかり他、丸善出版株式会社、発達心理学事典、2013年、p404-405

久保ゆかり他、東京大学出版会、発達科学入門1 理論と方法、2012年、pp.135-150

久保ゆかり他、新曜社、社会・文化に生きる人間、2012年、pp.214-227.

〔その他〕(計1件)

久保ゆかり、学びの場としての、子どものいざこざ 社会性の発達の観点から、日本の学童ほいく、第467号、2014年、pp.10-15 全国学童保育連絡協議会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保 ゆかり (KUBO、Yukari)

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：10195498